

「日本下水文化研究会」から「日本水循環文化研究協会」へ

運営委員会代表 稲場 紀久雄#

新たなスタート

「NPO 法人 日本下水文化研究会」(以下「文化研」)は、オミクロンの感染者急増が憂慮される中、1月22日東京駿河台の連合会館会議室で臨時総会を開き、改組後の新定款を議決しました。ここに発足以来35年の活動の上に立って「日本水循環文化研究協会」(以下「水循環協」)として新たな第一歩を踏み出しました。

活動35年の軌跡

文化研は、発足時は「下水文化研究会」という小さな小屋でした。この時から13年後の1999年、「NPO 法人日本下水文化研究会」という一軒の家になりました。文化研は、「水守」を自認する市民団体とし最も早くNPO法(1998年制定の特定非営利活動促進法)に基づく法人格を認定されました。こうして、さらに22年の歳月が流れました。

文化研は、これまで実に多くの仕事をして来ました。機関誌『下水文化研究』(年報)は32号を数え、年間数度発刊する会報『ふくりゆう』は100号を超えました。二年に一回開催の『下水文化研究発表会』は15回を数え、講演集は15冊になります。文化研が成し遂げた全ての仕事をこの小さな紙面で紹介することは不可能です。私達は、2020年7月『NPO法人化20周年記念誌』を編纂し、下水文化研究会時代からの仕事の全容を記録しました。私は、記念誌を通して改めて活動の全容を振り返り、「文化研とその仲間」を心から誇りに思います。

下水文化から水循環文化へ

文化研は、35年に亘って活動を続けて来たのに、今になって何故改組に踏み切ったのでしょうか。多くの方々には、不思議に思われるでしょう。その理由は、一重に「下水文化研究が水循環文化へと広がり、そして深まった」ためです。この成長プロセスは、「蝶々の幼虫が

蛸から脱皮して蝶々に成長する自然のプロセス」に例えられるでしょう。

言うまでもなく、「水循環とは、水が水圏から気圏に蒸発し、凝縮して雲となり、やがて雨滴となって降下し、土圏の地表面において、一部は地表水として流出し、残部は直ちに、あるいは滞留・貯留後に浸透し、地下水となって地下を流動した後、池泉や湖沼、河川や海の底から湧出し、再び水圏を構成する無限に循環するサイクル」です。これを「水の輪」と言うことが出来るでしょう。水循環の原動力は、主に地球表面の70%を占める海と太陽エネルギーで、この循環によって初めて地球上の水資源が有限量から無限量に変わり、私達人類を初め地球上の全生命体の生命が持続できるのです。

ところが、私達人間や社会は、その存在と活動に於いて“水の輪”を歪め、あるいは切断し、様々な悪影響を及ぼします。このため、私達人類は、その発祥の時から「水循環文化」を創り育み、「水循環の健全性」を守って来たのです。文化研が研究し普及に努めて来た「下水文化」は、「水循環文化」の最重要の構成要素です。私達は、文化研の活動を通じて、この事実を認識するようになりました。このため2008年から始まった「水循環基本法」制定活動に積極的に参加し、常に陰になって活動を支え、同法制定後も「健全な水循環」の再生のため市民の立場から忍耐強く活動を続けているのです。

改組、文化研は前進する！

一連の活動の過程で、私達は、「水循環文化」の研究の一層の深化と全国の市民団体との連携の必要性を痛感しました。私達は、文化研が「水守」を自認する以上、「下水文化」研究から脱皮して「水循環」の立場から「水の輪」を守るべきだと考えるに至りました。そこで、文化研の2019年度総会で『NPO法人20周年記念誌』の編纂を決定し、発足以来33年の業績を纏めま

した。そして、2020年度総会で「改組」の決議を行い、定款改正案の検討に入りました。ところが、2020年の年初から新型コロナウイルスによるパンデミックがわが国を襲いました。このため、計画通り総会で定款改正案の議決を得ることが出来ないまま時が流れました。

しかし、このことが文化研にとって幸いでした。私達は、新体制を検討する過程で、改組後の事務量の多さ、強い指導力と財政基盤強化の必要性など困難な問題に直面したのです。このため、一時は、改組を断念し、文化研の解散を真剣に考えました。しかし、『20周年記念誌』に書いた「未来へ—文化研は前進する—」の中の次の一文が私達の迷いを吹き払ってくれました。

「文化研の歩む道は、水守の道だ。水守の道とは、日本と世界の“水の輪”、即ち“健全な水循環サイクル”

を守るために“人の輪”を結び、時空を超えて“生命の輪”を守ることであり、かくすることで幸せな暮らしと社会を守るのである」（171頁）

かくして、2022年1月22日、文化研の臨時総会が開かれ、改正定款案が承認されました。ここに新たに日本水循環文化研究協会が発足することになったのです。

ご支援、ご協力を！

水循環協を支える家の大黒柱は、現在の文化研のそれで、細いものです。現状のままでは、水循環協という大きな構造物を支えきれないでしょう。私達は、これから水循環協の活動を通して日本の水を、世界の水を守って参ります。この場を借りまして、多くの方々のご支援とご協力をお願いするものです。